娼婦たちの暦

講談社

娼婦たちの暦

昭和五十年九月二十日　第一刷発行

著　者　津村節子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　島田製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取りかえします。
©津村節子　昭和五十年
Printed in Japan　(文一)

目次

相川心中 5
チャブ屋のお七 45
キセル貝 79
金魚鉢 123
春の哀れ 165
乾いた花 205
夜の水槽 235
あとがき 264

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

作品集　娼婦たちの暦

相川心中

一

出帆のドラが鳴り響き、タラップが取りはずされた。

佐渡までわずか二時間十分だが、船旅の珍しい人々は甲板から見送りの人々に手を振ったり、慌しい出帆の光景をカメラに収めようと走り廻ったりしている。

藤子はそれらの人々から離れた舳先に近い甲板の手すりにもたれていた。昨日まで晴れていたのに、あいにく今日は細かい雨が降り出して、霧のように視界をはばんでいる。

船はゆっくりと河口を下り、海へ出る。やがてゆるやかに左右へ揺れはじめた。沖へ出るに従って、風も少し出てきたようである。

岸を離れてしまえば、前方にはただ海のひろがりがあるだけだ。出帆の光景を珍しがっていた人々も、みな船室にはいってしまった。細かい雨とはいえ、衣服を通して軀がしっとり

と湿り気を帯びてくる。

船内の廊下に流しているのか、エンジンの音にまじって相川音頭のレコードが聞こえてきた。哀切で単調な繰り返しが、藤子の心を滅入り込ませる。波のうねりにのって、船が高く浮かび、また低く沈む。てすりから半身を乗り出すようにしてそのうねりを見ているうちに、藤子は軀を波間に引き込まれるような眩暈を感じた。

「もう、中へはいられたほうがいいですよ」

不意に背後から声がした。

振り向くと、陽焼けした肌の若い男が立っていた。油気のない髪が、強まってきた風に乱れて額にかかるのをうるさそうにかき上げながら、

「波を見ていると酔いますよ。顔が真青だ」

と言う。

「ええ」

「気分が悪いんですか。薬を貰って来ましょうか」

「いいえ、だいじょうぶです」

「雨も降っているし、ここにいちゃ風邪をひく。さ、中へおはいりなさい」

自分よりも年が若そうなのに、そんな世話をやく男がうるさくて、藤子はもう返事をしなかった。男は、それ以上言うのは無駄だと思ったらしく、藤子をそのままにして甲板を去っ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

た。

あの男に、自分の姿がどう映ったであろう。誰もいなくなった甲板で、真青な顔をして手すりから身を乗り出すように海をのぞき込んでいる女を、ひょっとしたら身投げでもする気か、と懸念して声をかけてきたのかもしれない。

死ぬ気ならいまここから飛び込めばいいのだな、と藤子は改めて人気のない甲板を見渡した。この海は、去年の夏の夜、登志夫と睡眠薬を飲み、手をつなぎながらはいって行った、北陸の漁村の海につながっている。登志夫は二つ年下の二十四、悪い遺伝のあるかれとの結婚を反対され、心中を誘った自分が救われて、登志夫は死んだ。その海に見入っていた自分の様子に、あの男が異常を感じたのも不思議はないかもしれない。

知らぬ間に本州へ逆もどりしたのではあるまいかと思うほど、大きな陸地が見え、船は間もなく両津(りょうつ)港に着いた。港の周辺には、旅行者相手に海産物を売る物売りたちがたむろし、土産物店や各種商店、旅館などが建ち並ぶメインストリートは、ジーパンにTシャツ、ミニやパンタロン、さまざまな服装の若者たちがあふれている。島内を廻る観光バスが、所要時間と値段によって幾コースも出ており、船から吐き出された人々はそのバスに分乗し、あるいは市内に散って行った。

藤子は観光地を見て廻る気はない。今夜は相川(あいかわ)へ泊るつもりだったので、とりあえず相川

行きのバスに乗った。雨は幸い上ったようだ。大佐渡、小佐渡山脈の間にひらける平野も、荒海に浮かぶ島というイメージと異って肥沃そうに見え、通過する街並もなかなか賑やかである。流人の島のイメージにこだわっているほうが認識不足なのだが、藤子はなんとなく期待をはぐらかされたような気がして窓外を眺めていた。

中山峠の隧道をぬけると、間もなく相川だった。両津港に降りてから、漸く海を見た。島の反対側に出たわけである。

海岸線と平行に、帯のように町を縦断している繁華街には、大小の旅館がいくつも目につくのだが、どこも満員で、予約なしの藤子は断られつづけた。五月の連休とはいえ、一人ぐらいどこかにもぐり込めるだろうと思ったのが甘かった。それに女の一人旅というのも、敬遠されるのである。重くなってきたスーツケースを足許に置いて街角に佇んでいると、

「どうしました。こんなところで」

と声をかけられた。

「あら」

先刻船の甲板で話しかけてきた若い男である。現金なもので、あのときはうるさく思ったが、今は思わず懐かしさが声に籠る。

「今夜は相川泊りですか」

「それが、どこも断られて」

「じゃ、予約もしないでいきなり来たんですか」
「無謀でしたわね」
「いつもこんなに混むわけじゃないが、ちょうどシーズンですからね」
「どこか近くの小さな町へ行けば、泊れるような宿もあるんじゃないでしょうか。あなたはどこへお泊りになるんですの？」
「ぼくはここの人間ですよ。両津の友人のところへ寄って、多分あなたの次のバスだったんでしょう。いま家へ帰るところです」
「相川の方だったんですか」
「とにかく宿を見つけなくてはいけませんね。どんなところでもいいですか」
「この際贅沢は申しませんわ」
「じゃ、一緒にいらっしゃい」
男は、軽々と藤子のスーツケースをさげ、大股に歩き出した。
相川の町を通りぬけ、荒い季節風にさらされて白っぽく羽目板を反り返らせている民家が点々とする街道を更に北へ進むと、小さな川があった。川のほとりに、いままで目にして来た家々と異り、個人住宅としてはかなり大きな格子造りの、二階は手すりのある縁を廻らした似たような様式の建物が建ち並んでいる。その一廓の入口とおぼしきところには、門かぶりのように枝を深く差しのべた古い松が一本あって、それが一層この聚落を町から孤立させ

ているような印象を与えていた。
男は、その中の一軒の前に立って声をかけた。何度か大きな声で呼んでいると、やがて奥から足を引きずるようにして老婆が出て来た。
「おばさん、この人今夜泊めてやってくれんかのう」
「ええんかのう。こんなとこで」
老婆は藤子を見つめながら、困惑したように言った。
「結構ですとも、助かりましたわ」
男は藤子のスーツケースを式台に置き、じゃあ僕はこれでと足早やに去った。
家の内部は、入口から裏まで土間がつきぬけていて、その左手にかなり広い部屋が通りに面してある。隣の帳場らしい部屋には、天井近くに部屋の巾いっぱいの馬鹿馬鹿しく大きな神棚がまつってあり、帳場のわきから二階へ昇る巾広い階段は、この家が昔かなり栄えていた旅館ででもあったのか、中央部がすり減っていた。
老婆はリュウマチで、脚腰が不自由だから二階へ案内することはできないが、自分で上って気に入った部屋を使ってくれと言った。
藤子は言われたまま二階に上った。上ったところはぐるりと階段を囲むように広い廊下がめぐらされていて、その廊下に添って小部屋がいくつも並んでいる。
気に入った部屋を使えと言うが、どの部屋も掃除がしてない。畳を上げたままで、ほこり

が一センチもつもっている座敷もある。廊下に面しているところは襖で、部屋の両側は壁と床の間、表に面している部分は先刻外から見上げた縁が張り出しているのか、明り障子が閉っている。障子の紙に何やら文字が書かれているので近寄ってみると、黄ばんだ和紙に

初菊　一円五十銭

千代鶴　二円

などとあるのが読みとれた。

読みにくい文字を拾い読みしていると、淀んでいる部屋の空気が動いたような気がした。何げなくふり向くと、部屋の隅に女が立っている。

藤子は声をあげそうになった。二階は無人と思っていたのに、いつの間に来たのか足音も聞こえなかった。

女は、薄い笑いを含んだ顔で、じっと藤子に視線を据えている。丹念な化粧をほどこした顔に夥しい皺が刻まれており、かなりの年齢と思われるのに、大きな花柄の古めかしいお召を着ている。

女がまばたきもせず藤子を見つめつづけているので、藤子のほうで眼をそらせた。女の傍を通りぬけて廊下へ出ると、時々は使用しているらしい一番きれいな部屋へ荷物を置き、そのまま階下へ駈け降りた。

「二階の女の人は――」

「ああ、みつのことかのう。別に悪いことはせんですっちゃ」
「女中さんですか」
「ここがおかしゅうて、てえして役にも立たんだけどの」
老婆は自分の頭を指して言った。
夜になるまで時間があり、ここにいる気にもならなくて町をぶらつくことにした。こんな宿では何を食べさせられるかわからないので、外で食事をして来る、と言うと、そのほうが好都合らしく、それでは風呂だけ沸かしておくと言う。車をよんで貰って、藤子はその宿を出た。
「なんだか変なうちねえ。かなり大きいのに、いま商売していないの？」
「ここは町からはずれているんで、転業するといっても無理なんですよ。建物が建物だから、旅館とか料理屋ということになるんでしょうが、観光シーズンが限られていますしね。下宿屋や、鉱山関係者の寮になった家もありますが、あの家はちょっと土地の者はいやがるんで」
「そう言えば、変な女の人がいたわ」
「ああ、おみつさんですか。あれはおとなしい気違いで、別に悪いことをするわけじゃないんですがね」
「じゃ、あのおばあさんが商売気がないのね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com